9.6サントリーホール/15時開演 The 551st Subscription Concert Sunday, 6th September, 15:00 / Suntory Hall 第585回 サントリーホール名曲シリーズ 13_[H] サントリーホール/15時開演 The 585th Suntory Hall Popular Series Sunday, 13th September, 15:00 / Suntory Hall 指揮/シルヴァン・カンブルラン(常任指揮者) Principal Conductor SYLVAIN CAMBRELING クリスティアーネ・イーヴェン (イゾルデ) CHRISTIANE IVEN (Isolde) ----- P.8 クラウディア・マーンケ (ブランゲーネ) CLAUDIA MAHNKE (Brangäne) P.9 与儀 巧 (若い水夫、舵手、牧童) TAKUMI YOGI (Junger Seemann, Ein Steuermann, Ein Hirt) P.11 男声合唱/新国立劇場合唱団 Men's Chorus NEW NATIONAL THEATRE CHORUS P.11 合唱指揮/富平恭平 Chorusmaster KYOHEI TOMIHIRA 副指揮/ティル・ドレーマン Assistant Conductor TILL DRÖMANN コンサートマスター/長原幸太 Concertmaster KOTA NAGAHARA ワーグナー 楽劇〈トリスタンとイゾルデ〉 (全3幕/演奏会形式・字幕付き)「約5時間・休憩含」………… WAGNER / Tristan und Isolde (3 acts in concert style with Japanese supertitles) 第1幕 アイルランド国からコーンウォール国へ向かって 航海中の船の上「約80分] 「休憩 Intermission 30分] 第2幕 コーンウォール国のマルケの王館の中の、 イゾルデの部屋の前庭 [約80分] 「休憩 Intermission 30分] 第3幕 ブルターニュのカーレオールにあるトリスタンの居城の中 [約80分] 字幕: 三宅幸夫 字幕操作: Zimakuプラス 「主催」読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団

[助成] 念文化庁文化芸術振興費補助金 (トップレベルの舞台芸術創造事業)

[協力] アフラック (アメリカンファミリー生命保険会社) (9/6)、日本ワーグナー協会

[助成] 公益財団法人アフィニス文化財団 🛲

第551回 定期演奏会

9.11_[金]

第18回 読響メトロポリタン・シリーズ 東京芸術劇場コンサートホール/19時開演

The 18th Yomikvo Metropolitan Series Friday, 11th September, 19:00 / Tokyo Metropolitan Theatre

指揮/シ	/ルヴァン・カンブルラン (常任指揮者)	
	Principal Conductor SYLVAIN CAMBRELING	•••

P.6 ピアノ/小曽根真 Piano MAKOTO OZONE -----P.12

コンサートマスター/ダニエル・ゲーデ Concertmaster DANIEL GAEDE

ムソルグスキー 交響詩 〈はげ山の一夜〉 (原典版) [約12分] ····· P.19 MUSSORGSKY / Night on Bald Mountain (original version)

ラフマニノフ パガニーニの主題による狂詩曲 作品43 [約22分] ----- P.20 RACHMANINOFF / Rhapsody on a Theme of Paganini, op. 43

「休憩 Intermission]

ムソルグスキー (ラヴェル編) 組曲〈展覧会の絵〉 [約35分] ------- P.21 MUSSORGSKY (arr. RAVEL) / Pictures at an Exhibition

プロムナードー I.グノームス (こびと) - プロムナード

- Ⅱ 古城 プロムナード
- Ⅲ. テュイルリー (遊びの後の子供たちの喧嘩)
- Ⅳ. ビドロ(牛車) プロムナード
- V. 殻をつけた雛鳥のバレエ
- VI サムエル・ゴールデンベルクとシュムイレ (金持ちのユダヤ人と貧しいユダヤ人)
- Ⅷ リモージュ (市場)
- Ⅲ. カタコンブ (古代ローマの地下墓地) 死せる言葉による死者への呼びかけ
- IX. 鶏の足の上の小屋 (バーバ・ヤガー = 民話上の妖婆)
- X. キエフの大門

[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団 [助成] ※文化庁文化芸術振興費補助金(トップレベルの舞台芸術創造事業) [事業提携] 東京芸術劇場

9.16_[*]

第7回 読響アンサンブル・シリーズ よみうり大手町ホール/19時30分開演(19時から解説)

The 7th Yomikyo Ensemble Series Wednesday, 16th September 19:30

※出演者と曲目のみ掲載しています。曲目解説は当日別紙を配布予定です。

《下野竜也のハイドン》

指揮/下野竜也(首席客演指揮者) Principal Guest Conductor TATSUYA SHIMONO

チェロ/上村文乃 Cello AYANO KAMIMURA

ナビゲーター/鈴木美潮 (読売新聞東京本社メディア局編集委員) Navigator MISHIO SUZUKI

コンサートマスター/小森谷巧 Concertmaster TAKUMI KOMORIYA

※当初出演を予定していた遠藤真理(チェロ)は、出演できなくなりました。

ハイドン 王立音楽家協会のための行進曲 変ホ長調 [約5分] HAYDN / March for the Royal Society of Musicians in E flat major

ハイドン チェロ協奏曲 第1番 ハ長調 [約24分]

HAYDN / Cello Concerto No. 1 in C major

- I. Moderato
- II. Adagio
- II. Allegro molto

[休憩 Intermission]

ハイドン 交響曲 第101番 ニ長調〈時計〉[約29分]

HAYDN / Symphony No. 101 in D major "The Clock"

- I . Adagio Presto
- II. Andante
- III. Menuetto. Allegretto
- IV. Finale. Vivace

[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団

9.20 _[H]	第180回 東京芸術劇場マチネーシリーズ 東京芸術劇場コンサートホール/14時開演 The 180th Tokyo Metropolitan Theatre Matinée Series Sunday, 20th September, 14:00 / Tokyo Metropolitan Theatre
21 _[月·祝]	第82回 みなとみらいホリデー名曲シリーズ 横浜みなとみらいホール/14時開演
∠ 」【[月·祝]	The 82nd Yokohama Minato Mirai Holiday Popular Series Monday, 21st September, 14:00 / Yokohama Minato Mirai Hall

指揮/尾高忠明(名誉客演指揮者) Honorary Guest Conductor TADAAKI OTAKA
リャードフ 魔法にかけられた湖 作品62 [約6分]
モーツァルト ヴァイオリン協奏曲 第5番 イ長調 K.219 〈トルコ風〉 [約31分]
【休憩 Intermission】

チャイコフスキー 交響曲 第4番 ヘ短調 作品36 [約44分] …………… TCHAIKOVSKY / Symphony No. 4 in F minor, op. 36

- I . Andante sostenuto Moderato con anima
- II. Andantino in modo di canzona
- III. Scherzo. Pizzicato ostinato Allegro
- IV. Finale. Allegro con fuoco

[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団 [助成] 念文化庁文化芸術振興費補助金 (トップレベルの舞台芸術創造事業 [事業提携] 東京芸術劇場(9/20) [協力] 横浜みなとみらいホール (9/21)

シルヴァン・カンブルラン

(常任指揮者) Sylvain Cambreling

本場のオペラ経験を 読響で初披露 〈トリスタン〉に注目

幅広いレパートリーと躍動感 あふれる緻密な演奏。そうした 高い評価を得ている読響常任指 揮者が、ワーグナーの代表作 〈トリスタンとイゾルデ〉(演奏会 形式)に挑む。ヨーロッパの歌 劇場で培ったオペラ上演の手腕

をどのように発揮してくれるのか。別プログラムのロシア音楽での色彩感豊かな響きにも注目したい。

1948年フランス・アミアン生まれ。これまでにブリュッセルのベルギー王立モネ歌劇場の音楽監督、フランクフルト歌劇場の音楽総監督、バーデンバーデン&フライブルクSWR(南西ドイツ放送)響の首席指揮者を歴任し、現在はシュトゥットガルト歌劇場の音楽総監督とクラングフォーラム・ウィーンの首席客演指揮者を兼任する。また、巨匠セルジュ・チェリビダッケの後任として、ドイツ・マインツのヨハネス・グーテンベルク



大学で指揮科の招 聘教授も務める。

客演指揮者としてはウィーン・フィル、ベルリン・フィルを始めとする欧米の一流楽団と共演しており、オペラ指揮者としてもザルツブルク音楽祭、メトロポリタン・オペラ、パリ・オペラ座などに数多く出演している。

録音にも積極的だ。読響とのCDでは《幻想交響曲》《ペトルーシュカ》 《第九》《春の祭典/中国の不思議な役人》《スコットランド》などをリリースしている。

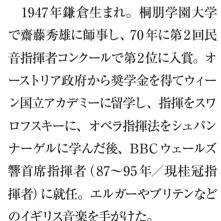
- ◇9月6日 定期演奏会
- ◇9月11日 読響メトロポリタン・シリーズ
- ◇9月13日 サントリーホール名曲シリーズ

尾高忠明

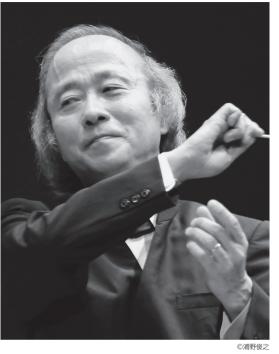
(名誉客演指揮者 Tadaaki Otaka

じっくり円熟を深め 読響と共に歩む 練達の名匠

読響の第6代常任指揮者で、 現在は名誉客演指揮者を務める 名匠が、リャードフとチャイコフ スキーで練達の棒さばきを披露 する。ヴァイオリンの諏訪内晶子 と共演するモーツァルトにも期待 が高まる。



東京フィル常任指揮者 (74~91年/ 現桂冠指揮者)、紀尾井シンフォニエッタ 東京ミュージカル・アドバイザー/首席指 揮者 (95~2000年/現桂冠名誉指揮



者)、札幌響音楽監督 (04~15年)、メルボルン響首席客演指揮者 (10~12年)、新国立劇場オペラ芸術監督 (10~14年)を歴任。名実ともに日本を代表する指揮者としては、国内の主要オーケストラはもちろんのこと、ロンドン響、ロンドン・フィル、BBC響、ベルリン放送響、フランクフルト放送響など、世界各地のオーケストラを指揮している。また、東京芸術大学指揮科特別教授、相愛大学音楽学部客員教授として、後進の指導にもあたっている。

- ◇9月20日 東京芸術劇場マチネーシリーズ
- ◇9月21日 みなとみらいホリデー名曲シリーズ

rtist of the month



トリスタン エリン・ケイヴス

Tristan Erin Caves

アメリカ・カリフォルニア生まれ。エール大学とジュリアード音楽院で学んだ後にヨーロッパに渡り、現在はドイツのフランクフルトを拠点に活躍する。これまでにベルリン国立歌劇場、チューリヒ歌劇場、バーゼル歌劇場、ライン・ドイツ・オペラほかに出演し、〈ホフマン物語〉〈ワルキューレ〉〈トスカ〉〈ドン・カルロ〉などを歌っている。カンブルランが音楽総監督を務めるシュトゥットガルト歌劇場では近年、今回の〈トリスタン〉のほか、〈さまよえるオランダ人〉のエリック、〈ナクソス島のアリアドネ〉のバッカスなどを歌っている。

- ◇9月6日 定期演奏会
- ◇9月13日 サントリーホール名曲シリーズ



Christine Schneider

イゾルデクリスティアーネ・イーヴェン

Isolde Christiane Iven

ドイツ・ハンブルクに生まれ、ブレーメン 歌劇場でキャリアをスタートさせた。マン ハイム国立歌劇場、ハノーファー歌劇場な どを経て、現在はシュトゥットガルト歌劇 場の専属。近年は〈ナクソス島のアリアド ネ〉のアリアドネ、〈ばらの騎士〉の元帥 夫人、〈パルジファル〉のクンドリで好評を 博した。これまでにマリナー指揮のアカデ ミー室内管、アーノンクール指揮のロイヤ ル・コンセルトへボウ管、シャイー指揮のミ ラノ・スカラ座管などと共演し、欧州各地 の主要音楽祭にも出演している。ミュンへ ン音楽演劇大学の声楽科教授でもある。

- ◇9月6日 定期演奏会
- ◇9月13日 サントリーホール名曲シリーズ



マルケアッティラ・ユン

Marke Attila Jun

ソウル生まれ。ソウル国立大とケルン音楽大で学ぶ。98年にシュトゥットガルト歌劇場の〈リゴレット〉でヨーロッパ・デビューし、99年にシノーポリの指揮で〈ワルキューレ〉に出演。同年、〈ローエングリン〉でバイロイト音楽祭にデビューして以後、同音楽祭の常連として活躍し、ワーグナー歌手としての名声を確立した。2014年にはキリル・ペトレンコ指揮の〈神々の黄昏〉でハーゲンを歌っている。また、ミラノ・スカラ座、ウィーン国立歌劇場をはじめとする欧米の主要歌劇場で〈さまよえるオランダ人〉〈トゥーランドット〉などに出演している。

- ◇9月6日 定期演奏会
- ◇9月13日 サントリーホール名曲シリーズ



©Monika Rittershaus

ブランゲーネクラウディア・マーンケ

Brangäne Claudia Mahnke

ドイツ生まれ。ドレスデン音楽大で学び、1996年から2006年までシュトゥットガルト歌劇場に所属した。05年、ミュンヘン・オペラ音楽祭の開幕公演で注目を集め、06年からフランクフルト歌劇場の専属歌手を務めている。〈トリスタンとイゾルデ〉〈パルジファル〉などワーグナーを得意とし、13年には〈ラインの黄金〉〈ワルキューレ〉でフリッカほかを歌ってバイロイト音楽祭デビューを飾り、14年と15年も主要な役を歌い好評を博した。ベルリン国立歌劇場、バイエルン州立歌劇場、サンフランシスコ・オペラにも出演している。

- ◇9月6日 定期演奏会
- ◇9月13日 サントリーホール名曲シリーズ



クルヴェナル石野繁生

Kurwenal Shigeo Ishino

チューリヒの国際オペラスタジオで研修し、1994年、オトマール・シェック声楽コンクールで優勝。97年にスイスのバーゼル歌劇場と専属契約を結び、98年にはドイツ語圏の新進歌手部門における"シンガー・オブ・ザ・イヤー"に選ばれた。その後、ハノーファー歌劇場を経て、06年よりシュトゥットガルト歌劇場の専属。〈ドン・ジョヴァンニ〉〈魔笛〉などモーツァルトのレパートリーを中心に、〈トリスタンとイゾルデ〉〈エフゲニー・オネーギン〉などを歌う。13年にドイツのバーデン・ヴュルテンベルク州より宮廷歌手の称号を与えられた。

- ◇9月6日 定期演奏会
- ◇9月13日 サントリーホール名曲シリーズ



©Marco Borggreve

メロートアンドレ・モルシュ

Melot André Morsch

ドイツ生まれ。アムステルダム音楽院などで学んだ後、2007年にシュトゥットガルトの国際リートコンクールで優勝して、一躍注目を集めた。現在はシュトゥットガルト歌劇場の専属歌手を務め〈フィガロの結婚〉のフィガロ、〈ドン・ジョヴァンニ〉のレポレロなどを歌っている。ライプツィヒ、リヨン、パリ、チューリヒなどの歌劇場やレザール・フロリサン、ル・ポエム・アルモニークといった古楽オーケストラやオランダ放送管からも招かれている。指揮者ではクリスティ、ルセ、メッツマッハー、デ・ワールトらと定期的に共演を重ねている。

- ◇9月6日 定期演奏会
- ◇9月13日 サントリーホール名曲シリーズ



若い水夫、舵手、牧童 与儀 巧

Junger Seemann, Ein Steuermann, Ein Hirt Takumi Yogi

国立音楽大学卒業。同大学院修了後、ボローニャに留学。第6回東京音楽コンクール第1位及び聴衆賞受賞。輝かしく伸びやかな美声と堅実な音楽性で近年目覚ましい活躍を見せており、紀尾井ホール主催によるリサイタル、準・メルクル指揮二期会〈イドメネオ〉タイトルロール、「NHKニューイヤーオペラコンサート」への連続出演など、その勢いは留まるところを知らない。今秋の二期会〈ウィーン気質〉では初の本格的オペレッタ作品に挑む。読響とは12年にカンブルラン指揮〈第九〉で共演し好評を得た。二期会会員。

- ◇9月6日 定期演奏会
- ◇9月13日 サントリーホール名曲シリーズ

男声合唱

新国立劇場合唱団

Men's Chorus New National Theatre Chorus

合唱指揮

富平恭平

Chorusmaster Kyohei Tomihira

新国立劇場のオペラ公演を担う合唱 団として1997年の劇場オープンと共に 活動を開始した。100名を超えるメン バーは、高水準の歌唱力と優れた演技 力、緻密なアンサンブルと豊かな声量 で国内外のメディアから高い評価を得 ている。読響とは2007年以降、年末 の〈第九〉公演をはじめ、モーツァルト の〈レクイエム〉やヴェルディの〈レクイ エム〉など多くの共演を重ねてきた。特 に常任指揮者カンブルランの下では、 ベルリオーズの〈ロミオとジュリエット〉 (2011年9月)、ラヴェルの 〈ダフニスと クロエ〉(12年10月)、ストラヴィンスキ ーの〈詩篇交響曲〉(13年9月)で見事 な歌唱を披露し、絶賛を博した。

今回は男性メンバーのみの出演と なる。

- ◇9月6日 定期演奏会
- ◇9月13日 サントリーホール名曲シリーズ



○大杉佳平

ピアノ小曽根真

Piano Makoto Ozone

米国バークリー音楽大ジャズ作・編曲 科を卒業、1983年アルバム《OZONE》 で世界デビュー。2003年にグラミー賞 にノミネート。近年はクラシックにも取 り組み、国内外の主要オーケストラと共 演を重ね高い評価を得ている。

2014年にはニューヨーク・フィルのアジアツアーに初の日本人ジャズピアニストとして抜擢され、ニューヨークでの特別公演へも出演。NYタイムズ紙をはじめ多くのメディアでその成功が絶賛された。同年、サンフランシスコ響にも招かれている。平成25年度文部科学大臣賞を受賞。

◇9月11日 読響メトロポリタン・シリーズ



©Kivotaka Sait

ヴァイオリン諏訪内晶子

Violin Akiko Suwanai

日本を代表するヴァイオリニスト。1990年、チャイコフスキー国際コンクールに史上最年少で優勝し、日本人初の栄誉に輝いた。桐朋学園ソリスト・ディプロマ・コースを修了後、ニューヨークのジュリアード音楽院に留学し、ドロシー・ディレイに師事。これまでに小澤征爾、メータ、デュトワらの指揮の下、ボストン響、フィラデルフィア管、パリ管などと共演した。2013年から「国際音楽祭 NIPPON」を企画し、芸術監督を務める。使用楽器は、日本音楽財団より貸与された1714年製作のストラディヴァリウス「ドルフィン」。

- ◇9月20日 東京芸術劇場マチネーシリーズ
- ◇9月21日 みなとみらいホリデー名曲シリーズ



9.6 [H]

9.13 [н]

二字幸夫(みやけゆきお)・慶應義塾大学名誉教授・音楽学

楽劇〈トリスタンとイゾルデ〉(全3幕/演奏会形式・字幕付き)

作詞: 1857年/作曲: 1857~59年/初演: 1865年、ミュンヘン宮廷歌劇場/演奏時間: 約5時間(休憩含)

遍在するエニグマ

リヒャルト・ワーグナー (1813~83) の楽劇〈トリスタンとイゾルデ〉は、初 演からちょうど150年経った今も、われ われを挑発しつづけている。その理由は、 おそらく作品に内在するエニグマ(謎めいたもの、得体の知れないもの)にあるのだろう。まずは音楽と台本双方から、 象徴的な例をひとつずつ挙げておこう。

答えのない問い

トリスタン和音

前奏曲冒頭、短6度の跳躍上行に導かれた半音階下行音形と、最上声の半音階上行音形が組み合わされて、いわゆるトリスタン和音(へーロー嬰ニー嬰ト)が響く[譜例1]。細かい説明は省くが、この和音は変化音に彩られているとはいえ、さしあたりイ短調の属和音(減七和音)とも、下属和音とも、また重属和音とも解釈しうる。

つまり、それぞれ機能の異なる三つ

Tristan und Isold

の和音に還元可能というわけで、この あたりにトリスタン和音の曖昧な性格 が端的に表れている。しかも三つの解 釈には、それぞれに一長一短があり、 「いずれとも決め難い」のが正直なと ころ。これがトリスタン和音における エニグマの実態なのである。



マルケの嘆き

もちろん音楽だけ論じてもはじまらない。作品全体を象徴するトリスタン和音には、どのようなドラマ上の意味が付与されているのだろうか? それを読み解く鍵は第2幕、マルケ王の長大なモノローグにある。

トリスタンの裏切りを見せつけられた マルケは、事ここに至った経緯を自分の 立場から語り、まっとうな人間が直面し た、まっとうな疑問「いかなる神も救う ことのできない/この地獄にどうして突 き落とした|をトリスタンにぶつける。

そしていっとき、やり場のない憤りにかられたものの、マルケは落ち着きを取り戻し、ほとんど自問に近いかたちで「底なしに深い/謎に包まれたその訳合いを/世に明らかにできる者がいるだろうか?」と問いかける。この「謎」にはバスクラリネットとトロンボーンの

「底なしに深い」響きが当てられ、つづい てトリスタン和音を先頭に、〈前奏曲〉 の冒頭部が大々的に回帰してくる。

それを背景とするトリスタンの答えはこうだ。同情のまなざしでマルケを見上げながら「おお、王よ、/わたしにはなんとも申し上げられませぬ。/またお尋ねのことについて/ほかから答えを得られることもありますまい」と……。この底なしに深い謎に包まれた作品〈トリスタン〉を前にすると、筆者にはトリスタンの言葉が、なにやら自作に添えられたワーグナーの注釈のように思えてくるのだ。

このように〈トリスタン〉における エニグマは、ひとつの解釈=答えに確 定できない(トリスタン和音)、ある いは深い謎に問いかけても答えは返っ てこない(マルケの嘆き)、つまりは 「答えのない問い」のひとことに要約 されるだろう。

あらすじ

前史 コーンウォールの勇士トリスタンは、敵国アイルランドの勇士モーロルトを決闘で討ち果たしたが、みずからも深手を負ってアイルランドに漂着した。医術に通じた同国の王女イゾルデは、トリスタンが自分の許婚者モーロルトの仇であることを見破ったが、傷を癒やして本国に送り返してしまった。しかし今度は、トリスタンが

Pristan und Isolde

コーンウォールの王マルケの使者として和議を結び、イゾルデがマルケの妃となるよう取りまとめたのである。誇り高いイゾルデは、この仕打ちに耐えられなかった。

第1幕 コーンウォールに向かう船の上。イゾルデは侍女ブランゲーネに、 人質同然の身の上になった怒りをぶち

まける。 ——イゾルデは侍女を遣わし て、トリスタンの出頭を求めるが、慇 勤無礼な返答と、従者クルヴェナルの
 アイルランドを揶揄する歌しか返って こない。――彼女は侍女にこれまでの いきさつを語る。瀕死の男の正体を見 破り、復讐を遂げようとした。「けれ ど病の床から/男はこちらを見たの、/ 剣ではなく、/手でもなく、/わたし の瞳にひたと見入ったし。それで思わず 剣を取り落としてしまった、と。―― 目的地は近い。イゾルデはクルヴェナ ルに脅迫めいた口調でトリスタンの伺 候を求め、無理心中に思いを定めてブ ランゲーネに死の薬を用意させる。 ――イゾルデは出頭したトリスタンと 言葉を交わし、和解の杯を勧める。彼 女の真意を察したトリスタンが、つづ いてイゾルデが杯をあおり、ふたりは その場に倒れた。しかしブランゲーネ が死の薬を愛の薬にすり替えていたた め、ふたりは自分たちの愛を妨げてき た昼のしがらみから解き放たれる。

第2幕 コーンウォール城内、イゾルデの館の前。夏の夜。マルケ王の妃となったイゾルデは、トリスタンと密会を重ねている。今夜も、王が狩りに出るというのでイゾルデはトリスタンを心待ちにしている。ブランゲーネはこれが罠であると警告するが、イゾルデは聞く耳を持たない。彼女はトリス

タンに危険を知らせる松明を、ためら わずに消してしまう。 ——歓喜あふれ る再会。二人は昼を呪い、夜を讃える。 「夜の帳よ、下りてこい/おお、愛の 夜よ。/生きていることを/忘れさせ ておくれ。/おまえの懐に/抱きと り、この世から/解き放っておくれ! | と。二度にわたるブランゲーネの警告 にもかかわらず、愛の二重唱は高揚と 切迫を重ね、絶頂を迎えようとする瞬 間にブランゲーネが悲鳴を上げる。 ――マルケ王の一行が登場。廷臣メロ ートの訴えどおり、密会の現場を目の 当たりにしたマルケは、深く傷ついて 理由をただすが、トリスタンは弁明せ ず、イゾルデに夜の国についてきてく れるかと問う。激怒したメロートに決 闘を挑んだトリスタンは、わざと剣を 取り落してその刃に倒れる。

第3幕 コーンウォールと海を隔てたカーレオールにあるトリスタンの城。重傷を負った主人を、従者クルヴェナルが船で故郷に連れ帰ったのだ。彼は意識を取り戻した主人に、イゾルデを呼ぶ使者を遣わしたと告げるが、彼の傷を癒やすイゾルデの船はなかなか姿を現さない。苦しむトリスタンは「わたしが醸し、/わたしのために注がれ、/わたしが歓びをすすりながら/飲み干したおそろしい飲み物よ!/呪われてあれ、/それを醸したこの身

も呪われてあれ!」と愛を呪詛するにいたる。――しかしその時、イゾルデの船の到来を告げる信号が響きわたる。クルヴェナルを迎えにやっているあいだ、トリスタンは喜びのあまり包帯を引きちぎり、彼女が登場したときはひとことイゾルデの名を呼ぶのみで、こときれる。――そこへマルケの船も到着。乱心したクルヴェナルはメロートを討ち取り、みずからも戦いに

倒れる。マルケはブランゲーネから事情を聞いて、二人を許しにやってきたのだが、屍の山を目の前にしてひたすら嘆くしかない。――やがてイゾルデは放心のていで立ち上がり、トリスタンへの愛を歌いつつ息を引き取る。「大波が打ち寄せ、/高鳴る響きは鳴りわたり、世界の息吹が吹きかよう/万有のうちに/溺れ――/沈む――/ ヤれ知らぬ――/ 至高の快楽! 」。

音楽の聴きどころ

一筆書き

前奏曲 前述のトリスタン和音だけでなく、前奏曲全体の構造も異例といってよい。ワーグナーは、愛の憧憬がとどまるところを知らず、死によってしか解決しえないことを作品の中心に据えた。作者の注釈に「ただ一度だけ、長く分節されたひとつの線で、もっとも控えめな告白と、もっとも優しい献身から始め……もっとも強い衝動、もっとも激しい努力へと、その満たされることのない欲求を高めていった」とあるように、この前奏曲は一筆書きのような効果を求めている。じっさい第

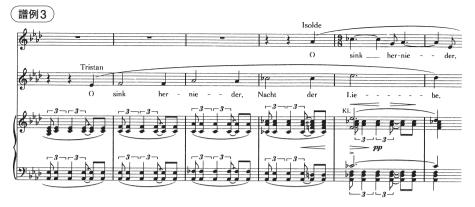
Tristan and Isoldel

83小節の爆発に至るまで、音楽はさまざまな技法を総動員して、息長いクレッシェンド/アッチェレランドを体現している。この頂点に向けて心理的に持続する高揚効果は、これからも至るところで出会うことになるだろう。

死の和音

第1幕 トリスタン和音と並んで、作品を特徴づけているのが「ナポリの和音」である。第2場の冒頭、遠くにトリスタンの姿を認めたイゾルデは、毒杯をあおる決意を表明する。「(わたしのために選ばれながら/わたしから失われていったあの男……) 死神に捧げ





られた、あの頭!/死神に捧げられた、この心!」。この「頭」の語に当てられているのがナポリの和音というわけで[**譜例2**]、のちに「死」に関わる文脈のなかで用いられることになる。

たとえば、暗い物思いにふけっていたトリスタンは、水夫たちの掛け声を耳にして、われに返り「ここはどこだ?」と叫ぶ。すかさすイゾルデは「すぐ着くわ」と返す。字面どおりに受け取れば、航海の目的地コーンウォールに近いということになろうが、その目的地にナポリの和音が当てられていることに注目するならば、「あなたはもうすぐ死ぬ運命よ」も含意されているのだ。すぐれて演劇的といわれる第1幕だが、そこには言葉だけでなく、音楽も深く関わっているのである。

夜の讃歌

第2幕 松明をめぐるイゾルデとブランゲーネの緊迫したやりとりも捨てがたいが、やはりこの幕の中核をなすの

は長大な二重唱(とくに後半)だろう。 昼の世界に別れを告げ、夜の世界へと 逃避する二人。「夜の帳よ、下りてこい /おお、愛の夜よ」は、すべてのものが 輪郭を失ってゆくさまを描く「譜例3]。

もちろん曖昧な効果を上げるには、 音楽を作るうえで精密な計算が必要で ある。謎に満ちたトリスタン和音を水 平的にばらして歌唱声部に用いている こともさることながら、この場の背景 をなす弦楽器のリズムが複雑きわまり ない。1拍を3分割した音価と2分割 した音価を組み合わせ、しかもそれら をタイで結び合わせるのだ。楽譜を見 ないかぎり、ただ聴いただけでは認識 できないリズムであり、まさに精密な リズムが曖昧な効果をもたらす好例と いえようか。

また、リズムだけでなく拍子も、 3/4ないし9/8拍子で記譜されてはい るものの、イゾルデの歌唱声部にみら れるように実質は6/8拍子ないし2/4 拍子をとることも少なくない。このよ うにロマン主義の極致ともいわれる 〈夜の讃歌〉も、やがて狩りの一行の乱 入によって断ち切られてしまう。

嘆きの調べ

第3幕 〈トリスタン〉はイゾルデの「愛の死」によって閉じられるが、これは第2幕の「それではもろともに死にましょう」の再現にほかならない。つまり第2幕の予告が幕切れで成就するというわけで、この幕の中核をなすのは、むしろ体と心に深手を負ったトリスタンの「痛み」にあるとみてよい。

熱にうかされたトリスタンは、イゾルデが海を渡ってくるさまを幻視し、自分にはっきりと見えているものが「おまえには見えないのか?」と激しく叱責するようにクルヴェナルに問いかける。だが、城壁の外から聞こえてくるのは、牧人が吹く民俗楽器シャルマイのみ[譜例4] ……。クルヴェナルの言葉「まだ船影が見えないということです」に、トリスタンは初めて、この〈嘆きの調べ〉が城壁の内(クルヴェナル)と外(牧人)を結ぶ合図の役割を担っていることを悟り、こうつ

ぶやく。「心にしみるなつかしい歌よ、 /おまえの嘆くような調べには/そう いう意味があったのか?」。

まだ船影が見えないという合図だけではない。このイングリッシュ・ホルンによる単旋律は、繰り返されるたびにトリスタンの記憶を呼び覚ます。「父はわたしを残して死に/母もわたしを生んで死んだが/やるせないあこがれをそそる/あの調べは/彼らの死の床にも/せつせつと響いていたに違いない」。そしてモーロルトから受けた「傷口の毒が/心臓の近くまで回ってきたために/死を間近に/口もきけずに小舟に横たわっていたときも/あの調べが/あこがれを訴えるようにめんめんと響いていた」と。

つまり〈嘆きの調べ〉が聞こえてくるのは、人間が生と死の境目にあるときなのだ。しかし、それが意味するところは定かではない。「そういう意味があったのか?」(直訳:私はおまえをそのように理解せねばならないのか?)という疑問はいつまでも残る。このようにエニグマは、〈トリスタン〉の全篇に浸透しているのである。

譜例4



楽器編成/フルート3 (ピッコロ持替)、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット3、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器 (トライアングル、シンバル)、ハープ、バンダ (ホルン6、トランペット3、トロンボーン3、イングリッシュ・ホルン、(ホルツトランペット))、弦五部



道下京子(みちした きょうこ)・音楽評論家

ムソルグスキー 交響詩〈はげ山の一夜〉(原典版

作曲: 1866~67年/初演: 1968年、モスクワ (原典版の初演)/演奏時間: 約12分

ロシアの伝説を生き生きと表現

モデスト・ムソルグスキー(1839~81)は、職業音楽家ではなかった(軍人や官吏)ものの、西洋音楽の伝統に東縛されず、ロシアの民衆の声や伝統、現実などを自らの感性で生き生きと表現しようとした。交響詩〈はげ山の一夜〉や組曲〈展覧会の絵〉は、それを最もよく表している。

交響詩〈はげ山の一夜〉で原典版と 呼ばれるものは、1867年にムソルグ スキーが試みた〈はげ山の聖ヨハネ祭 の夜〉の草稿である。彼は1864年、 未完の歌劇〈サランボー〉の第3幕の 音楽として、この題材による創作を手 掛けたとされる。これが、〈はげ山の 一夜〉の最も古い断片である。その後、 彼は四つの場面からなる作品を書き上 げた。しかし、この作品はバラキレフ らには評価されず、作曲家の生前に演 奏されることはなかった。この稿が、 原典版の基礎である。

その後、〈はげ山の聖ヨハネ祭の夜〉の素材は、歌劇〈ソロチンスクの定期市〉の第3幕の合唱曲 "若者の夢" へ用いられたり、オペラ・バレエ〈ムラダ〉第3幕の音楽への転用も試みられた(未完)。作曲家の死後、リムスキー=コルサコフは1886年に〈はげ山の聖ヨハネ祭の夜〉をもとに、歌劇〈ソロチンスクの定期市〉の"若者の夢"の部分などを加えて、管弦楽作品として〈はげ山の一夜〉を編んだ。

本日の原典版は、一般的に演奏されるリムスキー=コルサコフ版の色彩豊かなオーケストレーションと比べ、もっと野性的で生々しいエネルギーに満ちている。打楽器をふんだんに用い、バイタリティ溢れる音楽である。

楽器編成/フルート2、ピッコロ、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、コルネット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器(トライアングル、タンブリン、小太鼓、シンバル、大太鼓、銅鑼)、弦五部

ムソルグスキー(ラヴェル編)

組曲〈展覧会の絵〉

編曲:1922年/初演:1922年、パリ(ラヴェル編曲版)/演奏時間:約35分

作曲:1934年/初演:1934年、ボルティモア (アメリカ)/演奏時間:約22分 超絶技巧と甘美な情感が融合

パガニーニの主題による狂詩曲 作品43

ヴィルトゥオーゾ・ピアニストとし ても知られたセルゲイ・ラフマニノフ (1873~1943)。彼の祖父アルカージ は軍人でありながら、アイルランド出 身の作曲家ジョン・フィールドにピア ノを師事し、音楽愛好家としても知ら れていた。親戚には、リストの弟子で 当時の名ピアニスト、アレクサンド ル・ジロティもおり、ラフマニノフは 彼からもピアノを学んだ。モスクワ音 楽院では、ピアノのほかに作曲、和声 法、対位法を修め、とりわけピアノで は、スクリャービンと1、2を争う腕前 であった。卒業後は、指揮者としても 活躍。彼は、高度なピアノの演奏技巧 の表現とロシア・リリシズムが一体化 した重厚なピアノ作品を多く作曲し た。また、レコーディングにも積極的 で、彼のピアノ演奏は現在も聴くこと

そんなピアノの名手が1934年、ピアノとオーケストラによる〈パガニーニの主題による狂詩曲〉を書き上げた。アメリカで活動していた彼は、一時期

スイスに拠点を移しており、その地で 作品を完成させる。音楽は、ヴァイオ リンの鬼才ニコロ・パガニーニが作曲 した〈24のカプリース〉の最後の曲を 主題とし、変奏曲の書法に基づき、主 題(アレグロ・ヴィヴァーチェ イ短調 4分の2拍子) は冒頭ではなく、第1変 奏と第2変奏の間に置かれ、序奏→第 1変奏→主題→第2変奏~第24変奏の 順を辿る。ちなみに曲中で有名なの は、情感豊かな第18変奏。作曲家は この主題をもとに、単に主題を変形さ せるにとどまらず、各変奏を独立した 曲として扱い(各変奏に独自性を与え た性格変奏)、きわめて表情豊かな変 奏を展開している。主題はイ短調で、 全体的にこの主調が用いられている が、中間部分で多少の転調を伴う。ま た第7変奏など、曲中にはグレゴリオ 聖歌の〈怒りの日〉も引用されている。 曲の随所に超絶技巧がちりばめられ、 同時にダイナミックかつ甘美な情感が 融合している。

楽器編成/フルート2、ピッコロ、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランベット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器 (グロッケンシュピール、シンバル、サスペンデット・シンバル、大太鼓、小太鼓、トライアングル)、ハープ、弦五部、独奏ピアノ

友人の遺作展そのものを音楽に

ムソルグスキーは、バラキレフ、ボロディン、リムスキー=コルサコフ、キュイとともに「5人組」のひとりに数えられる。ロシア国民主義の音楽の推進者であった評論家ヴラディーミル・スターソフは、「5人組」ではなく「力強い仲間たち」と呼んでいたという。

組曲〈展覧会の絵〉は、副題に「友人 ヴィクトル・ガルトマンの思い出しをも つ。ガルトマンは、ムソルグスキーの友 人であり、建築家、画家として活動して いた。ロシアでは認められなかった不遇 な画家ガルトマンに、彼は深く共鳴し、 親交を結んだ。ところが1873年、ガル トマンはこの世を去る。上記のスターソ フはガルトマンの遺作展の開催を提唱 し、翌年に実現した。遺作展を見たムソ ルグスキーは、この曲の創作のインスピ レーションを得る。ひと月足らずで作曲 されたといい、スターソフに捧げられた。 もともと独奏ピアノのための作品である が、1886年に行われた最初の出版に際し ては、リムスキー=コルサコフによって

手を加えられた。原典版を尊重した楽譜 の出版は大きく遅れ、1931年である。

ムソルグスキーは、友人ガルトマンの遺作展の情景そのものを音楽にした。絵と絵の間をつなぐ中間部分として、彼は組曲全体の主題的な役割を担う"プロムナード"を置いている。このプロムナードは、遺作展で絵と絵の間を歩くムソルグスキー自身を表しているだけではなく、これを反復して演奏することで、同時に作品の統一的な形式の構成にも貢献している。遺作展に展示された絵は、ロシアのみならずさまざまな場面が描かれており、彼はそれぞれの絵画に応じて多彩な表現で作曲している。

このピアノ作品を、モーリス・ラヴェルはセルゲイ・クーセヴィツキーからの依頼により、1922年に管弦楽用に編み直したとされる。第7曲"リモージュの市場"の前のプロムナードを省くなど、ピアノ曲と異なる部分もあるが、色彩的で、あたかもオペラのような場面を連想させる洗練されたラヴェルの編曲は、聴く者にこの組曲をより情感的に訴えかける。

楽器編成/フルート3(ピッコロ持替)、オーボエ3(イングリッシュ・ホルン持替)、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、アルトサクソフォン、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、(バリトン)、ティンパニ、打楽器(大太鼓、シンバル、トライアングル、サスペンデット・シンバル、小太鼓、ムチ、ラチェット、シロフォン、グロッケンシュピール、銅鑼、チューブラーベル)、ハープ2、チェレスタ、弦五部

ができる。

9.20_[H]

9.21 [月·祝]

堀 朋平(ほりともへい)・音楽学者

型ャードフ **魔法にかけられた湖** 作品 62

作曲:1908~09年/初演:1909年3月6日、サンクトペテルブルク/演奏時間:約6分

物語の一場面を鮮明に切り取る

「5人組」と呼ばれる作曲家が活躍し た19世紀前半のロシア。その中心的 な教育機関であるサンクトペテルブル ク音楽院で学んだアナトーリ・リャー ドフ (1855~1914) は、ほんの十数年 の世代差で5人組に続く作曲家であ る。先輩たちが育んだ自国の民謡や説 話の伝統を大切にしつつも、洗練され た管弦楽法によるロマン派的な甘美さ を本領とした。それも、壮大な絵巻物 を描くのではなく、物語の一場面を、 まるで絵本の1ページを切り取ったよ うに簡潔かつ鮮明に提示する風景描写 がリャードフの魅力である。得意とし たピアノ音楽のジャンルでも、ショパ ンのような繊細な表現が際立っている。

そんな性質ゆえだろう、幾度か試み たオペラという大ジャンルは実を結ぶ ことがなかったが、そのために書きと

めた音楽のいくつかは、後に独立した 管弦楽曲として出版されている。〈魔法 にかけられた湖〉もその一つであり、シ ンデレラの説話をめぐるオペラ(1909) 年スケッチ開始)の一場面に基づく。 「おとぎ話的な絵 | という副題が添え られている。「絶えず変化する静けさ」 ……リャードフみずからがそう説明す るように、この6分ばかりの音楽の魅 力は、時間を忘れさせる広大な湖面を 細やかに波立てる弦楽器のトレモロ と、それに乗って弱音でささやき交わ す管楽器の表情の移ろいである。ほぼ 中央にあたる箇所では音量が上がり、 ハープが印象的に沸き立つ。それでい て水面に何かが浮上して息をのむドラ マが進む……というわけでもない。副 題にいうとおり、まさに一幅の「おと ぎ話的な絵 |をお楽しみいただきたい。

楽器編成/フルート3、オーボエ2、クラリネット3、ファゴット2、ホルン4、ティンパニ、打楽器 (大太鼓)、ハープ、チェレスタ、弦五部

モーツァルト

ヴァイオリン協奏曲 第5番 (長調 K.219 〈トルコ風〉

作曲:1775年12月20日/初演:おそらく同年、ザルツブルク/演奏時間:約31分

個性際立つユニークな傑作

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト (1756~91) にとって協奏曲といえば何より、25歳でウィーンに居を構えたのち、クラヴィーアの腕前を示して頭角を現すための大事なジャンルだったことが思い出されるだろう。だが、お抱え作曲家だったザルツブルク時代にも、ヴァイオリンのために5作品が残されている。これらは雇い主コロレド大司教の宮廷で自身の独奏を披露するために書かれたと考えられており、いずれもコンサートマスターを務めた1773~75年の間に成立している。

さて、父とのヨーロッパ巡業が一息 ついて故郷に腰を落ち着けた19歳の モーツァルトは、1765年6月に2作目 となるヴァイオリン協奏曲を書いた。 長らく滞在したミュンヘンの音楽生活 の影響であろう、ここには2年前の第 1番とは異なる華やかさが満ちている。 晩年の深刻さとはまた違う、オーケス トラと独奏の優雅な対話を基にしつ つ、新たな作品がそれからほぼ2か月 おきに書き継がれた。どれも個性が際 立ったこれら4作品のうち、最後にあ たる第5番はとりわけユニークな特徴 をそなえている。

第1楽章 1分間ほどでオーケストラ が一通り主題を紹介した後、独奏が挨 拶する――それはお決まりの構成なの だが、「アダージョ」での、まるで別次 元からの登場である。独奏楽器の手の 込んだ入りは後年のクラヴィーア協奏 曲で研ぎ澄まされるが、第2楽章の 緩やかな時間が流れ込んだこれほど大 胆なやり方は、モーツァルトの全器楽 曲にあっても異例である。「メヌエッ ト | の指示を持つ第3楽章は(この年 に書かれた他の協奏曲と同じく) さま ざまな主題をつなぎ合わせた愉快なフ ィナーレ。中間部分は短調に急変し、 荒々しい和音連打を聴かせる。低弦は 「弓の裏で | 楽器を叩くよう楽譜上に 指示されており、打楽器の効果をあげ る。トルコ行進曲を模した「トルコ風 のリズム」が用いられており、強国ト ルコによる包囲の記憶も生々しいオー ストリアにあって、聴き手はひときわ 興奮したにちがいない。

楽器編成/オーボエ2、ホルン2、弦五部、独奏ヴァイオリン

チャイコフスキー

交響曲 第4番 个短調作品36

作曲:1876~77年/初演:1878年2月22日、サンクトペテルブルク/演奏時間:約44分

冷酷な運命と心の奥底を表現

37歳のピョートル・イリイチ・チャ イコフスキー(1840~93)ほど「運命」 の冷酷さを思いつめた作曲家もいない だろう。同性愛者と言われるのを恐れ た彼は、7月に或る女性と結婚するも、 間もなく破綻。凍れる9月のモスクワ 川に身を投げてみても、傷は癒えるは ずもなかった。「私の心の奥底を反映 していない箇所はただの1小節たりと もない。パトロンのメック夫人に後 年そう語ったように、交響曲第4番に は、作曲家の心と身体を苛む運命がそ のまま反映されているのである。「 で記したチャイコフスキー自身の言葉 に耳を傾けながら、全曲のあらすじを 追ってみよう。

モスクワ川投身の数日前に完成された第1楽章は、金管の威圧的な第1主題で幕を開ける。頭上に髪の毛1本で吊るされたこの「ダモクレスの剣」は「魂に絶えず毒を注ぎこむ」「運命」であり、音楽の進行を脅かす。そこから「逃避」するには「夢への耽溺」しかない。第2主題はやさしい木管で流れ、運命のへ

短調から最も遠いロ長調に逃れるもの の、「運命が私たちを残酷に呼び覚ま す」。あの剣の主題が帰ってくるのだ。

19世紀の作曲家たちは、二つの主題や楽章にしばしば対立する内容を託してきたわけだが、チャイコフスキーの場合、この対立は「運命」対「逃避」となって全曲を貫く。追憶の第2楽章で描かれるのは「夜半にただひとり家の中に座っている時に訪れる憂うつな感情」である。第3楽章ではもっと賑やかな世界が描かれ、中間部には「酔っ払いの農夫の歌」や「軍楽隊の奏楽」も入り混じる。

空想豊かな人物もいつかは「運命」との対決に立ち戻らなくてはならないが、しかし第4楽章でも「自分自身の中に歓喜が見いだせない」彼は、二つのロシア民謡の力を借りて踊り狂う。「他人の幸福を喜べ、そうすればまだ生きることはできる!」。自力ではなく外界の助けによってようやく闘争を乗り切ることができた点に、チャイコフスキーという作曲家の生き方が映し出されていよう。

楽器編成/フルート2、ピッコロ、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器(トライアングル、大太鼓、シンバル)、弦五部